
懺悔ごっこ

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

懺悔ごっこ

【Nコード】

N7398P

【作者名】

東雲咲夜

【あらすじ】

親に捨てられてしまった兄妹。そんな二人の小さな遊びは、懺悔ごっこ。本当は罪なんかなくて、許してほしいとも思わなくて。本当の罪は、ずっと胸に秘めたままで。

” カミサマ、シンプサマ ”

” わたしの ” ” ぼくの ”

『 罪をきいてください—— 』

それは、父親の浮気が原因だった。 たった一度きりの浮気。 でも母さんから見たら、これ以上ない裏切り。 後にも先にもない、その一回の浮気を母さんは許すことができなかった。

二人が離婚をしたのは、僕らが幼稚園の頃。 浮気がばれてから、あつというまの出来事だった。 僕と妹は、母さんに引き取ってもらえるのだとばかり思っていた。 父さんは、新しい人のところへいったから。 それなのに。

『 いない 』

それはなんてことのないある朝。 幼稚園へ行こうとした僕と妹に吐かれた言葉。 あんたたちなんて、いらないとそれは続いて。 たった一人の男がいなくなっただけで、母さんは僕らを捨てた。 無言でバッグをもって、妹の手を引いて幼稚園へ向かった。 途中で、妹が泣き出した。 泣きじやくる妹を連れて、ただ歩いた。

母の言葉を伝えると、先生がひどく慌てふためいていたのを覚えている。 驚く幼稚園と母親の間でしばらくもめていたようだ。

その後、僕は孤児院へと預けられた。 そこには同じように、捨てられたり、死んだり、行き場のない子供がたくさんいた。 けれど僕はなかなか馴染むことができなくて、いつも妹の手を引いて散歩ばかりしていた。

孤児院の隣には、小さな教会があつた。その年で信心深い子供なんていなかったから、いつも神父さましかいなかった。みすばらしいけれどもどこか綺麗なその場所は、僕らのお氣に入りの場所になった。十字架を模した鈍い飾り。くすんだステンドグラスに差した光は、ところどころ欠けたマリア様の像へと降り注いで。妹がよくマリア様を見ては、母さんみたいだねといっていた。そうしたら神父さまが、マリア様はみんなのお母様なのですよ、と微笑みながら話してくれたのを今でも覚えていいる。妹のなかで母親は、いつまでも優しい人みたいで。

神父さまは外国の人だったけれど、とても日本語が上手だった。金色の綺麗な髪と青い目は宝石みたいで。日光にきらきらと光っていきれいだった。とても優しくて子供が好きみたいで、たくさんのおとぎ話をしてくれた。妹が、父さんみたいだといっていた。実の父親には、特になにもしてもらった記憶がない。面倒見のいい人……それが妹の望みだったのだろうか。

そんな教会の片隅には、四角く囲われた部屋が一つあった。ザンゲ室というんですよ、と神父さまから聞いた。ときおり大人が出入りしていた。

「お祈りをするの？」

そう聞いた僕に、神父さまはゆるく首を振りながら、答えてくれた。

「悪いことをしてしまったときに、謝りにくる場所なのですよ」

「どうしてあやまるの？ 何かいいこともあるの？」

少し舌足らずに妹が聞いて。

「神様が許してくださるんですよ」

その言葉が珍しくて。僕らは何度も口の中で、かみさま、と繰り返した。その後も、僕らはザンゲについて神父さまを質問攻めにした記憶がある。親切な神父様は、笑いながら、わかりやすく答えてくれた。

そうして僕らは、ザンゲのまねごとをするようになった。

孤児院の庭に落ちている枝を結んで作った、かさかさしてる十字架。話をするほう、聞くほうは交代でやった。他愛のない、子供の遊びだった。

妹が小さい手を組んで、僕に向かって話す。僕は神父さまの役で、「今日はきづかずに、アリさんを踏み潰してしまいました」

「ごめんなさい、という妹に僕はいう。」

「かみさまは優しいから、きっと許してくれるよ」

僕がお決まりの言葉をいうと、妹はうれしそうにいつも微笑んだ。彼女が笑ってくれるなら、何度だって僕はいつてあげた。言葉ひとつで笑ってくれるのなら、なんて簡単なんだろう。

「ねえ、今度はおにいちやんの番だよ」

そう妹に促されて、僕も両手を組んだ。特にあやまることなく、たぶんない。あるとしたら……

「ぼくのかわいい妹の、泣き虫が治りますように」

「お兄ちゃん！ それザンゲじゃないでしょ、お願いじゃないっ」

ぶう、と妹がほほを膨らませて怒るから、僕は笑う。ごめん、ごめんと。

「ぼくはアリさんふんでないから……とくに見当たらなくて」

「うそだあ。一匹くらいふんでるよう。神父さまに怒られるよ？」

「神様も神父さまも優しいから平気だよ」

ずるーいという妹といっしょに笑って。教会の裏庭で行われる遊びは、僕らにとっては大切な遊びだった。静かな時間がいつも流れていくから。

一度だけ、神父さまに見つかってしまったことがあった。いつものように教会の裏で遊んでいたときのこと。はりばての十字架を前に両手を合わせている僕らをみて、神父さまはすごく困った顔をしていたのを覚えている。妹とふたりで、ひたすらごめんなさいとあやまった。悪いことだとは思っていなかったけれど。神父さまがあまりにも困った顔をしていたから。結局、神父さまは笑って許してくれた。ぼくらの頭を優しくなでてくれて。

「あんまり、人前でやってはいけませんよ」

『はい、神父さま。わかりました』

僕らは声をそろえて答えた。

そのとき僕は、これがザンゲなのだと、強く感じていたのを覚えている。

学校に行く年齢になったころ、僕らは里親に引き取られた。孤児院がなくなってしまうから。

引き取られる直前まで、僕らは何度も何度も教会に足を運んだ。くすんだステンドグラスさえ、見れなくなると思うと寂しかった。妹なんて、神父さまに抱きついて泣いていた。神父さまはちよつと困っていた。

彼はきつと今もどこかの教会で、祈りを捧げているのだろう。

僕らを引き取ってくれた人達はとても親切だった。他人の子供なのに、とてもよくしてくれた。

妹はやっぱりすぐになついて、お父さんお母さんと呼んでいた。僕はというと、母さんと呼ぶのが恥ずかしい。父さんは別に平気なのだけれど。きつと、妹ほど無邪気ではないからかもしれない。

学校だつて、高校までちゃんと通わせてくれた。それでも、どこか申し訳なさを感じていた……

入学してすぐに僕らはバイトを始めた。少しずつ少しずつお金を貯めて、小さなアパートの一室を借りた。今はそこに妹と二人で住んでいる。親達は、学費だけでもださせてほしいといってくれて。二人でしきりに感謝した。ああ、本当になんて優しいんだろうか。僕らの母さん父さんとはは大違いだ。

男ならば誰にでも怒りうる、たった一度の浮気が許せなかった。そのくせ、父さんがいなくなっただけで、僕らを捨てて。自分の世界から一人欠けただけで、すべて投げ出してしまった可哀想な人。でもそのおかげで教会へもいけたし、今の親とも出会えたのだから、

いいのかもしれない。生んでくれたことには、感謝を。両親が離婚するまでは、あの二人が親で、幸せな時間はたしかにあったのだから。記憶は、もうずいぶんと薄れてしまったけれど。

二人だけの部屋で、今も懺悔は続いている。

百円均一で買ったちやちやなロザリオ。黒のハギレで作ったベール。妹が罪を告白する子羊。僕はそれを聞いて許す神父の役。昔はよく交代したもののだけれど、今はほとんど変わらない。部屋の中で静かに呟かれる懺悔は、僕らの生活の一部となっていた。

「神様、神父様。わたしの罪をきいてください」

胸にかけたロザリオを両手で握り締めて、妹が呟く。小さい頃はおてんばで泣き虫だったのに。今はすっかり年頃になり、とても綺麗になった。

「同級生の子を、少しねたましく思ってしまった。これはわたしの勝手な感情です」

「どうしてそう思ったの？」

僕がそう聞くと、妹はほほを少し赤らめて、ちよつとだけ目線を横へとずらした。その様子は、兄の僕が見ても可愛くていいらしい。

「それは……羨ましいって、思ったからです」

「何を？」

そう尋ねる僕の顔は、自然とゆるんでいく。もういい年齢だから。大体は予想がつく。

「神父様は、そんなにいじわるじゃないでしょう？ からかわないで」

ああ。ちよつと怒ると、頬をふくらませてそっぽを向くのは、昔からの癖だ。

「はは。ごめんごめん。神様はとても懐が深くてお優しい。許してくださいでしょう」

いつかと同じように、ごめんと僕はあやまる。悪いなんて、ちっとも思っちゃいけないのだけれど。

「いつもわたしばかり。兄さんもたまには懺悔したら？ 溜まっ

てるでしょう？」

すねていたかと思うと、悪戯っぽい目つきでそういう。いつのまにかすっかり女性だ。

「僕は、そんなに欲深くないもの。そんなにないんだよ」

妹は素直なのに、僕はいつも嘘ばかり。喉から手がでてしまうくらいに欲しいものがあるくせに。

何があつたつて、絶対に手放したくないものがあるくせに。

「そんなにつてことは、あるんじゃない。子羊さん、いつてちょうだい」

そういつて彼女が僕の首へとロザリオをむりやり掛けた。学生がして似合うものじゃないと思った。

「仕方がないなあ。僕は可愛い妹に、悪い虫がつかないかどうか心配です」

「それじゃあただのお悩み相談じゃない。まったく……」

困った顔をされたけれど、こればかりは本当なんだからいいだろう。そうして今度はロザリオをむしりとられた。

幼い頃も今も、変わらず十字架に向かって懺悔をする僕ら。いつまでも子供のままじゃあない。

そこに神様なんていやしない。祈りは宙へと散るだけ。罪なんて本当はないのにそれでも告白をする。許しなんていらぬ。

本当に罪があるならば、軽々しく懺悔なんてできないと思うのは間違っているだろうか。どんなものでも、それが本当の罪だというのが、許しなどないようなものじゃないのか。生活の一部でも、僕らにとつてはただのおままごとにすぎない。形ばかりの儀式。きつと、心のよりどころが欲しいだけ。

親に捨てられて——神様にまで捨てられたなんて信じたくはないから。勝手な思い込みだから、許してほしいなんていわない。受け入れてほしいとも思わない。これは二人だけの、遊びなんだから。

ひっそりと胸に秘めたこの想いも、たぶん罪なのだろう。吐き出してしまったなら、壊れてしまうもうい罪。神様の許しが届く前に、

儚く消えてしまう。だから僕はたとえ仮初の遊びでも、その想いは懺悔しない。

妹がたまにいう。神様や神父様も懺悔をすればいいのにね……と。神父様だって、誰もいないときに告白しているのかもしれない。神様は、わからないけれど。

これから先。僕らはずっとこの遊びをやめないだろう。

僕らは死ぬまでに、幾度懺悔という告白を繰り返すのだろうか。無邪気に笑う妹を見ながら、今日も僕は胸の中で一人、呟く。

神様、神父様。

抱いてはいけない想いをもってしまった、哀れな子羊の。

僕の罪をきいてください。

（後書き）

お読みくださりありがとうございました。

懺悔室……そんな響きだけでも、何か不思議なものを感じてしまいます。簡単に告白は出来るけれど、その中にどれほどの真実があるのやら。

それでは、またどこかで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7398p/>

懺悔ごっこ

2010年12月31日03時50分発行